

独占欲全開の肉食ドクターに溺愛されて
極甘懷妊しました

目次

独占欲全開の肉食ドクターに溺愛されて
極甘懷妊しました

5

番外編 天使が舞い降りる

289

独占欲全開の肉食ドクターに溺愛されて
極甘懷妊しました

プロローグ

当番日明けの朝日は、疲れた身体には眩し過ぎる。私、しずく、いるな雫石月は、今にも閉じそうな瞼と重い身体を引きずるようにして、近くのバス停に向かっていた。

春を迎えたばかりの穏やかな季節のはずが、昨日は急に気温が上昇し、夏日を観測するほどの暑さになる。その影響で、熱中症の症状と思われる患者からの救急要請が次から次へと入り、出勤から搬送までを終えて、署に戻ることもなく次の現場に向かうハードな勤務だった。本来は取れる夜中の仮眠も、ほとんど取れないまま夜が明けてしまう。

この季節、朝晩の寒暖差に身体がついていけず、目に見えなくとも負担になっている。しかも、夏ほど意識して水分を摂っていない。おかしいと気づいた時には、身体が限界を迎えているのだ。大学を卒業後、国家試験に見事合格し、採用試験も突破し救急救命士として勤務をして三年が経つ。そして四年目に入る今春、初めての転勤を経験した。

同じ市内なのだが、以前の人口が少なく長閑な地域とは違い、人口が多い地域の配属になった。救急車の出動件数も桁違いに多く、まだまだ慣れない日々……

署からバスで十五分ほどのところに引越してきて正解だった。以前は実家の近くのマンション

で一人暮らしをしていたけれど、そこからだと、ここまで通勤に四十分ほどかかる上に乗り換えもある。だから転勤を機に思い切ってこの地域に引越してきたのだ。

通勤通学のピークは過ぎても、車内はまだまだ混み合っている。たまたま目の前の席に座っていた学生が降りていき、周りを見渡してもお年寄りや身体の不自由な人の姿もなかったので、座らせてもらうことにした。

座つてすぐに、急激な睡魔に襲われる。心のどこかでは、乗り過ごさないように寝てはダメだとわかつてはいるけれど、疲労と睡魔には勝てない。

ほんの数分深い眠りに落ちていた時だった。

突然ドンツと強い衝撃を身体に感じる。

「きゃー」

「助けてー」

衝撃と共に悲鳴が辺りに響き渡り、一気に眠りから現実に取り戻された。

「一体、何が!?」

立って乗っていた乗客達が重なり合って転倒し、車内は大勢のケガ人が出ているとわかる。そして驚くことに、このバスはなんと前のバスに追突して止まっていた。

座席に座っていた私は、幸いにも無傷で済んでいる。

「大丈夫ですか？」

目の前に倒れている男子学生に声をかけた。

「はい……何とか」

捻挫や擦り傷程度の軽傷の人が多そうだけど、とにかく一旦外に出てもらって、ケガ人を診めないことには何とも言えない。

「すみません！ 扉付近にいらつしやる方、慌てずに扉を開けて順番に外へ避難してください」
「わ、わかりました」

事故の衝撃で騒がしい車内だが、私の指示は聞こえたようだ。サラリーマン風の男性が返事をしてくれる。扉が開かれて、外の生暖かい空気が車内に流れ込んできた。

「運転席付近におられる方、運転手さんの状況は？」

「それが、事故の直前から胸を押さえ始めて、今は意識がないです」

今回の事故の原因は、運転手の体調不良かもしれない。すぐに駆けつけたいけど、まだバスの中は騒然としていて移動もままならない。

誰かが通報しているかもしれないが、一刻を争う状況だ。きつと警察に連絡をしてくれているだろうと予想して、私は救急車を呼ぶために消防へ電話をかけた。

「はい、一一九番、港浜みなみはまです。火事ですか？ 救急ですか？」

「港浜みなみはま南消防署の雲石です。事故に遭遇しました。場所は、港浜中町みなとはまなかまちバス停付近です。バス同士の衝突事故で、多数のケガ人がいる模様。後続のバスに乗っていましたが、運転手の意識はないようです」

「わかりました。出動可能な救急車が向かいます」

「ありがとうございます」

電話を切って、救助作業に入る。私の周りの乗客達は、ケガをしているけれど意識があり、自力で動けそうだ。

「どなたか、近くのお店かどこかでAEDを借りてきてもらえませんか？」

「はい！ 探して来ます」

ちょうど後部の扉から降りようとしていたOL風の女性が返事してくれた。

少しずつ動きの取れるようになった車内で、状況を見ながら前方の運転席を目指す。

「大丈夫ですか？」

途中、足を挫くじいたのか立てない学生が目に入る。

「足が痛くて」

「僕が肩を貸します！」

「ありがとうございます。お願いします」

すぐ側にいた乗客が救護してくれた。

運転席にたどり着くと、数名の乗客が協力して運転手を寝かせてくれている。

「すみません。サイドブレーキは？」

「はい。先ほど引きました」

「ありがとうございます」

突然緊急事態に遭遇すると慌てふためいてしまうが、的確に行動してくれる人達がいて、誰も

が協力的で助かる。

危機に直面した時の団結力は侮れない。

運転手はまだ息をしているけれど、顔面蒼白で痙攣している。一刻も早くAEDが必要だ。

「AEDが必要な患者はどこだ？」

「ここです！ 貸してください」

先ほど返事をくれた女性ではなく、ボサボサの髪にマスク姿の長身の男性がAEDを持って、バスに乗り込んできた。

「チビは出しやばるな。俺がする」

「チ、チビ!？」

あまりの言いように、思わず叫んでしまう。

彼はまるで私の叫びが聞こえていないかのように、淡々と手を動かす。見知らぬ男性に突然チビ呼ばわりされて正直苛つきが拭えないけれど、今は一刻の猶予もない状態だ。AEDの使い方も理解しているようなので、ここは任せるしかない。男性は迷いなく的確な処置を施していき、その巧みな手さばきに不覚にも魅入ってしまった。目の前の患者を助けるという強い意志が伝わってくる。男性の言葉に苛ついていたのが嘘のように、いつしか意識を持つていかれて釘づけになっていた。

他にもケガ人はたくさんいるのだと自分に言い聞かせて処置をしていくものの、つつい男性に視線を向けてしまう。細くて綺麗な指と強い眼差しが印象的だ。

運転手は、ボサボサマスク男によって無事に蘇生措置が取られ、タイミングよく到着した救急車

に乗せられて搬送される。そして――

「チビ団子、またな」

ボサボサマスク男が最悪な一言を残すと、救急車に同乗してあつという間に去っていった。

「ちよつと、チビ団子って何？ 失礼な人！」

仕事の時は邪魔になるので、ロングヘアーをまとめて団子にしているけれど、チビ団子とは失礼にもほどがある。そんな失礼な男だったが、見事な処置に不覚にも魅了されてしまった。

AEDを迷いなく使いこなしていたので、医療従事者か同業者の可能性が高い。迷いない動きと、巧みな手さばきを思い出すとドキドキしてしまう。

でも、でもだ。確かに長身の彼からすると私はチビかもしれないが、あんな言い方しなくても……。自分のボサボサ頭を棚に上げて本当に失礼だ。二度と会いたくないと思う気持ちと、ドキドキと高鳴る胸が、私の中で複雑に渦巻く。

一気に最悪な気分になったはずが、男性の正体が気になるのは事実で……

とはいっても、今はまだまだケガ人が多数いてそれどころではない。

駆けつけた同僚の救急隊員達に助けられ必死に救助し、当番日明けのボロボロの身体で、結局昼まで手伝うことになった。

やっと現場が落ち着いたら頃、ふと先ほど言われた言葉が蘇った。

チビ団子――またなと言われたけれど、また会うことはあるのだろうか？

これが彼と私の衝撃な出会いの瞬間だった――

第一章 俺様ドクターとの再会

事故に遭遇したあと、家にたどり着いた時には身体が限界を迎えていた。

普段から事故現場に出動することも多く慣れてはいるけれど、当番日明けの身体にはかなり堪え（こた）た。そんな中、初めて会った見知らぬ男性からチビ団子と言われたことに腹が立つて、余計な氣力を消耗した気がする。それに加えて、不覚にもなぜかその男性にドキドキしてしまい、ドツと疲れてしまった。

玄関を通り抜けて、シャワーも浴びずベッドに直行。そのまま寝てしまい、次に起きた時には辺りは真っ暗で、一瞬今がいつなのかわからないくらい熟睡していた。

時計を見ると真夜中で、半日近く寝ていたようだ。昨夜は仮眠をする時間もなく、身体が睡眠を欲していたのだろう。

消防署は三週間を一サイクルとして、三交替制の勤務になっている。

当番日は、朝八時半から翌朝八時四十分まで勤務し、朝に仕事が終わるとその日は非番日になる。基本は休みだけれど、残っている仕事をしたりイベントなどに人手が足りないと手伝いに行ったり、当番日には参加できない研修が入ったりと必ず休めるわけではない。何もなければ休みになる感じだ。非番日の翌日は、公休日か当番日に当たる。

事故の日の翌日、私は公休日になっていたので、何とか氣力も体力も回復できた。

事故のバス二台には、合わせて百名弱の乗客が乗っていたけれど、死亡者がいなかったことが不幸中の幸いだ。

私の乗っていたバスの運転手だけが重症で入院している。やはり事故直前の心臓発作が原因だったのだ。他の乗客は、捻挫や打撲程度のケガで済んでいるが、こういう事故の場合どちらかというと精神的ショックの方が心配だ。

普段から事故現場に出動している私でも、突然のことに動揺する。

ボサボサマスク男の発言で、動揺していた氣持ちが一瞬にして吹き飛んだのは感謝だが、やはり今思い出しても腹が立つことに変わりはない。

もう二度と会いたくない氣持ちと、どこかでもう一度会いたい氣持ちが葛藤する。

ところが運命のいたずらかなのか、必然なのか……再会の日はすぐにやって来た――

公休日明け、私は身体も軽く出勤する。

今日の気温は、平年並みの予報だ。朝は肌寒さも感じるくらいで、熱中症の心配はあまりないだろう。

ただ、他にも様々な理由で救急要請は入るのだ。

この日の午前中は、救急要請はあるものの、二台ある救急車のどちらかは署にある状態で落ち着いていた。

ところが、午後になって痛ましい事故で救急要請が入って来た。

幼稚園児のお散歩の列に、高齢者の運転する車が突っ込んだと第一報が入り、署内が一気に慌ただしくなる。

出動時点では、複数人のケガ人が出ているとの情報しかない。救急車とレスキュー車に出動指示が出た。いつでも出動できるように備えているので、ほんの数分で署を出発する。私の乗る救急車には、今日は男性の先輩隊員二人が同乗していた。そのうちの一人は、ちょうど幼稚園に入園したばかりの子供をもつパパで、他人事ではない。

「ひどい事故ですかね」

「現場に着かないと何とも言えないな」

「搬送先の病院に、受け入れ可能状況を確認します」

「ああ」

搬送先が決まらずに、救急車の中で立ち往生してしまうことがある。前もってできる限りのことをしておきたい。

「港浜救命救急センターです」
みなとほま

「こちらは港浜南救急です。ただいま、事故現場に急行中ですが、現在患者の搬送受け入れは可能ですか？」

「こちらは今、事故の患者の処置中でして、あと二人が限界ですね」

「了解しました。現場の状況を見て再度連絡します」

港浜救命救急センターは、救急はもちろん医療センターとして一般診療も行う、この地域最大の病院だ。

「浜中総合病院救急です」
はまなか

「港浜南救急です。事故現場に急行中なのですが、救急搬送は可能ですか？」

「比較的余裕がありますが、人数がわかり次第もう一度連絡をください。ただ、本日脳外科の先生の手が足りていないです」

「了解しました。改めて連絡します」

浜中総合病院も、この地域では港浜に次ぐ救急対応の病院だ。

サイレンを鳴らして走ると周囲の車が避けてくれるので、現場まではすぐに到着する。

今回の事故現場は片側一車線で、辛うじて両側に歩道はあるものの、比較的狭い道だ。

現場の手前では車が渋滞している。パトカーも到着したところで、交通整理もままなっていない。何とか一般車両に避けてもらいたどり着いた現場は、かなり悲惨な状況だった。

スピードが出ていたのか、車は縁石を越えて、歩道の奥にある住宅の壁に衝突して止まっている。車の助手席側は完全に潰れて、エアバッグが出ています。エアバッグに助けられた運転手は意識が

あり、何とか自力で脱出できたようで、車の側に座り込んで呆然としていた。それよりも事故車両の周辺で、園児達が泣いているではないか。

「重傷の子はいますか？」

「助けてください！ 子供の足がまだ車と壁に挟まれています」

「えっ!？」

よく見ると、車の助手席側で大泣きしている子の足が、まだ車と壁の間に残ったままだ。

「痛いよ」

ただ不幸中の幸いなのが、潰されているわけではなく隙間に挟まっている状態で、足を切断する可能性は少ないだろう。

「すぐに、車を動かしてもらいます。車の下敷きになった子はいませんか？」

「はい。下敷きにはなっていないませんが、車が何人かに接触して壁にぶつかったので、ケガ人はたくさんいます」

「わかりました」

その場にいた警察官と救急隊員で、車を少し後ろに動かし救出した。

足が解放されて、その場に座り込んで泣き続けている子供の目線にしゃがみ込み、症状を診るために話しかける。

「お名前教えてくれる？」

「ウツウツ、グスン、たっくん」

「たっくん、痛かったね。お姉ちゃんに足を触らせてくれる？」

「痛くない？」

「軽く触れるだけなんだけど、痛かったら教えてくれる？」

「うん……」

すでに腫れて熱を持っている足に、そっと触れた。

「痛い」

「どんな感じで痛いか教えてくれる？」

「ずっと叩かれているみたいに痛いの」

「それは痛いね。すぐに病院へ行くからね」

「うん」

命に別状はないが重傷であるたっくんを、優先して搬送してもらえるように、先輩に声をかけた。救急車が搬送から戻って来るまでに、他の患者の処置をする。

運転手は、あとから到着した救急隊員が診てくれていた。

固まって泣き続ける園児と先生の元にも、警察官と救急隊員の姿が見える。でも大人の男性ばかりに囲まれて、子供達は怯えているようだ。

「失礼します。救急救命士の雫石です。子供達とお話しさせてもらってもいいですか？」

「お姉ちゃんも救急車に乗る人なの？」

女の子が、私に気づいて話しかけてくれた。

「そうだよ。お名前は？」

「りな」

「りなちゃん、私は月って名前なの。よろしくね」

りなちゃんは、この園児の中では一番しっかりしているようだ。先ほどまで子供達を囲んでいた

警察官達は、一步下がって私達の話を聞いてくれている。

「月ちゃん」

「そうだよ。怖かったね」

「うん。びっくりした。びっくりして転んじやったの」

足を見ると膝やふくらはぎに傷ができ、出血している。

「私も！」

「僕も！」

りなちゃんをきっかけに、みんながこぞって傷を見せてくれた。擦り傷程度から、少し縫うかもしれない傷の子までいるけれど、元気に反応してくれている。

そんな中、一人ボーツとしている子が気になった。

「僕のお名前は？」

「……」

「亮くんだよ。あのね、私、亮くんの隣にいたんだけど、車が来た時に後ろに転んで、ドンッて壁に頭を打ってたよ」

「えっ!? 亮くん、お姉ちゃんの声が聞こえる？」

「……」

目は開いているのに、反応がない。呼吸と脈は正常だが、どこかおかしい。驚いて黙っているわけではなさそうだ。

「ごめんね。ちょっと頭を触らせてね」

反応はないけれど、声をかけてからそっと触れると、後頭部に大きなたんこぶができていた。かなりの衝撃を受けたのだと予想できる。すぐに病院へ搬送するべきだと判断した。

「救急車は？」

「隼石さんが乗って来た、先ほど男の子を搬送した救急車が間もなく戻って来るそうです」

「そうですか。私は、亮くんと戻った救急車で病院に向かいます。もう一台の救急車もすぐに戻って来ると思うので、ケガの処置と搬送をお願いしてください。あとは、警察にお任せします」

「わかりました」

戻って来た救急車のストレッチャーに亮くんをそっと乗せて、急いで救急車に乗り込む。

「先ほどの患者はどこに搬送されたんですか？」

「男の子と運転手は浜中だ」

「電話では、脳外の先生が足りないとか？」

「病院でも直接確認したから間違いない」

「じゃあ、港浜ですね」

「すぐに確認する」

確認してくれている間にも、急変しないか心配だ。

「港浜オッケーだ。出すぞ」

「良かった」

サイレンを鳴らして走り出す。救急車だと、五分くらいで病院に着くだろう。

「私、ここに転勤してから港浜救命救急センターの搬送は、まだ今回で二回目です」
「そうなのか？」

「たまたまだと思いますが、浜中ばかりで」

「じゃあ、脳外の若き天才貴公子を知らないのか？」

「き、貴公子？ プツ、何ですか？ それ」

「知らない方が珍しいぞ。全国から貴公子目当てで患者がやって来るんだ」

「貴公子見たさに？」

「ああ、違う違う。天才って言っただろう？ 見た目だけでなく腕もピカイチだ」

「なんか胡散臭いですね。絶対に性格悪そう……」

「性格はわからないが、人にも自分にも厳しいって聞くな」

命を預かる現場なのだから厳しくて当然だろう。それは医者だけではなく、私達救急隊員も同じだ。

「先輩は見たことあるんですか？」

「数回な。まあ救急対応には、よっぽど人手が足りない時にしかないから」

「へえー」

「興味なさそうだな」

「全くないです。頭が良くて仕事ができて、貴公子なんて……絶対に性格悪いし信用できません」

「隼石って本当に変わってるよな。みんながすごい美少女が転勤してきたって、大騒ぎしてたんだ。しかも小柄だし、体力勝負のこの世界で本当に大丈夫か？ って心配したけど、実際は男顔負けの働きっぷりで驚いた」

「び、美少女!? 誰が？」

先輩が急に美少女なんて意味のわからないことを言うから、驚いて叫んでしまう。先日、ボサボサマスク男にチビ団子と言われたばかりだ。どちらかと言えば、美少女よりはチビ団子の方が自分でもしつくりくる気がする。

亮くんの様子に変化はなく、寝転んだ状態でただボーッとしたままだ。

脳震とうで出血などなければいいが、事故現場を目にしただけでも、かなりの衝撃だったとわかる。子供が車の下敷きになるという最悪の事態は免れたが、一歩間違えば何人も命を落としていただろう……

「着きます！」

運転していた先輩からの一言に、亮くんの意識があるまま病院に到着できてホッとする。まだまだ予断を許さない容態だけど、無事に医師の元へと送り届けることができたのだ。

大きな事故現場では、救急車が到着時にはすでに死亡していたり、救急車の中で亡くなるケースも多い。

病院の救急入り口に到着した瞬間、いきなり後部座席のドアが開いた。

その先には、白衣を着た超絶イケメンの姿が――

「えっ？」

「患者は？」

「あつ、こちらです。吉田^{よしだ}亮くん五歳です。血液型はA型、アレルギーはなしです。ご両親もこちらに向かつております」

救急車が出発する前に、亮くんの担任の先生に確認した。この幼稚園では、万が一に備えて散歩など外出の時には、先生が専用のスマホを持って出かける。そのスマホには、血液型やアレルギーの有無、緊急連絡先などの情報が登録されているのだ。

「すぐにCT検査するぞ」

「わかりました」

イケメンドクターは、ストレッチャーと共にあつという間に、病院内へと消えて行った。

「見ただろ？ 貴公子」

「はあ、確かにイケメンですね……」

「実物を見ても興味なさそうだな」

「そうですね。全く」

「女性って医者でイケメンなんて、お近づきになりたいと思うもんじゃないのか？」

「まあ、そういう人もいるかもしれませんがね。私は、一日で疲れそうなイケメンは無理です。目立つこと間違いなしですよ？ 考えただけで恐ろしい」

お前一人でも充分目立っていると、敢えて口にしなかった先輩の何か言いたげな視線には、全く

気づかなかった……

亮くんの病状は気になるけれど、救急搬送する患者は彼だけではない。

病院に搬送して受け入れ手続きをしたら、署に戻って次の出勤に控えなくてはならないのだ。車両の消毒、整備をして、備品の補充を行う。

そして、一番面倒な書類の作成も山のように溜まって待っている。出勤の報告書が終わらなければ、非番の日にしわ寄せが来るので、早く終わらせたい。

昼間の事故は、大きくニュースで報道されている。高齢ドライバーが前方の車が赤信号で停止したことに気づくのが遅れて、急ブレーキをかけたつもりがアクセルを踏んでしまった。そして前進したことに驚いて、咄嗟に左へハンドルを切ってしまう。

車を運転する以上、故意ではなくても運転手の責任は重大だ。

ニュースでも、軽傷者が複数と重傷者が二人と重体が一人で、運転手は重傷者に入っている。間違はなく重体は亮くんだろう……

まだまだ小さい命だ。無事であることを切に願う。

この時ばかりは、貴公子の腕を信じたい――

この日は、昼間の事故が嘘のように静かな夜だった。いつもの半分くらいの救急要請に、しっかりと仮眠時間が取れた。

朝を迎えて次の勤務者と交替し、私服に着替えて署を出る。

「おい」

バス停に向かっていると、誰かが後ろで呼ぶ声が聞こえた。『おい』では、誰を呼んでいるかわからないよと内心で突っ込みながらも、私には関係ないと思っていた。

「おい。チビ団子」

「……はあ？」
「よう」

先日の失礼な呼び方に苛立ちが蘇ると同時に、ドキドキと胸が高鳴る。
ところが――

振り返った先にいたのは、ボサボサマスク男ではない。

髪型こそ少し乱れているけれど、なぜか救命救急センターの貴公子が目の前にいたのだ。チビ団子と呼ばれたはずだと混乱する。

「えっと……。何か御用でしょうか？」

「今更、丁寧な言葉遣いは知らない」

「はい？ まともに話をするのは初めてですよね？」

「ああ。会うのは三度目だけだな」

チビ団子と確かに言われたが、ボサボサマスク男と貴公子が同一人物だとは到底思えない。いや、どこかで認めたくないのだ。

「それにしてもチビだな」

「チビって……。本当に失礼ですよ。アナタが大きいだけです」

「久遠^{くえん}柎^ぼだ」

「へ？」

「人の名前を聞いておいて、自己紹介もできないのか？」

『聞いてませんけど！』と内心突っ込みながらも名乗るしかない。

「霰石月です」

「月、行くぞ」

「へ？ どこへ？ しかも、何で呼び捨て？」

「メシ。夜勤明けで腹減った。しかも、昨日は夕食もともに食べてない」

「それは、お疲れ様です」

命を救う最前線で激務だったことがわかるので、素直に^{なまじ}辛い言葉をかけた。

そしてなぜかバス停とは反対の職場の方へと連れて行かれる。視線の先には、ハザードをつけた車が路上駐車していた。

しかも、貴公子のイメージにぴったりの白の高級外車だ。遠くから見ただけでわかるピカピカなボディが、朝日に照らされキラキラしている。

助手席側のドアを開けて乗るようにと促された。どこの誰かはわかっているけれど、初対面に近い人の車に乗るのはさすがに抵抗がある。

「どうした？ 乗らないのか？」

「えっ、イヤ、あの」

「何が不満だ？」

「不満はありませんけど……特について行く理由もないので」

「メシを食いながら、月が気になってる亮の話をしてやるよ」

「何でっ!？」

「母親かと思うほどの必死な様子だっただろう。心から心配しているのが伝わってきた」

「……」

あの一瞬でそこまで見られていたことに驚く。

「さあ乗って」

「は、はあ……。お邪魔します」

どこに連れて行かれるかの不安はあるけれど、亮くんがどうなったかは正直知りたい。救急搬送をした患者のその後は、必要事項がある場合にしか知ることができないのだ。貴公子も守秘義務があるだろうし、今回は特別なことだろう。

緊張していたはずなのに、乗り心地の良い車は丸一日働いた身体の眠気を誘う。

ダメだと思っても力が抜けて、首がグラグラ揺れてしまう。更には、車内にかかる心地よい音楽がまるで子守唄のようだ。

すでに半分夢の中にいる私は、貴公子が優しい眼差しで見つめていることすら全く気づきもしなかった。

どれくらい走ったのかハッと目が覚めた時には、なぜか目の前に海が広がっている。

「えっ!? こどここっ」

「やっと起きたか」

「えっと、私どれくらい寝てましたか？」

「一時間ほどかな……」

「す、すみません!」

「謝ることはない。勤務明けに連れ出したのは俺だから」

「でも、夜勤明けの久遠先生こそ、寝てないはずなのに」

「久遠先生はやめてくれ。仕事中美たいだ」

「久遠さん？」

「枉でいい」

「はい？ 呼べるわけなんです」

「まーくんでもいいぞ？」

「……」

私をからかって楽しんでいるに違いない。クールな貴公子のイメージが一瞬にして崩れ落ちる。

「ほら。言ってみろ」

「久遠さ……」

「却下」

最後まで言わせてもらえずに却下された。貴公子はどこに行ったのか……

「柎さんでいいですか？」

「まあ、いいか」

「で？　ここはどこですか？」

「海の景色に癒やされながら、食事をしようと思って」

車は海に面して停められているが、横を見ると白いレストランが建っていた。海しか視界に入っていないかったけれど、ここはレストランの駐車場だったらしい。

「疲れが取れそうですね」

「ああ、夜勤のあとボーツとしに来る。ここだと誰にも邪魔されないからな」

「寝不足じゃないんですか？」

「短くても何度か仮眠したし、慣れているから大丈夫だ」

私も、今でこそ数十分間だけでも寝たら回復できるようになったけれど、最初の頃は中途半端な仮眠で起こされると余計に疲れを感じたものだ。

「行くぞ」

「は、はい。……ってまだランチの時間には早くないですか？」

「ここはモーニングから開いていて、早い時間でも食事を注文できるんだ」

車を降りる柎さんに遅れを取らないように、急いで後を追う。改めて建物を見ると、おしゃれな外観の上品なレストランだ。

「いらつしやいませ」

扉を開けると、フワッとデミグラスソースの香りが辺りに漂い、一気に空腹を感じる。

「久遠様、いつもありがとうございます」

「ああ、二人だ」

柎さんの後ろに立つ私が小さくて見えなかったのか、店員さんが目を見開いて驚きの表情をしている。

「窓際の席にどうぞ」

案内をしてくれる女性が、なぜかチラチラと私を見ってくる。若干居心地が悪い私とは違い、柎さんは慣れた様子で席に向かっていたので後について行くしかない。席に座ると店員の女性から不機嫌にメニューを渡された。

「月、好きな物を好きなだけ頼めよ」

柎さんが私の名前を呼んだ瞬間、周囲の女性達から嫉妬のような視線を感じる。

しかも私が大食いのような言い方だ。実際、身体は小さいけれど一般的な女性より食べる方だと思う。でも、なぜ初めて食事をする柎さんにバレーしているのだろうか？

いや、きっと店員の女性に、私と親しい関係だと伝わるような言い方をしたのだろう。視線からも店員の女性が柎さんに好意を持っていて、私はその牽制に使われたのだ。やはり貴公子は、腹黒いと思う。

窓から見える素敵な景色と、夜勤明けにわざわざ連れて来てくれたことを思うと、文句が言いつ

らい……

きつともう来ることもないだろうし、これで柎さんの役に立てたのなら、腹は立つが反論はやめておく。その分、思いっきり食べて発散しようと思った。

店員が去ったあと、メニューを広げて驚く。

メニュー自体は、私の知る洋食のレストランと変わらないけれど、お値段が高い……

洋食セット四千五百円、オムライス二千五百円、ビーフシチュー三千五百円……

たくさん食べてやろうと意気込んだ気持ちだが、一瞬にして萎えてしまう。

「何にする？」

「……」

「どうした？ 食べたいものがないのか？」

「いえ。どれも美味しそうですが……」

「ですが？」

もうはつきり言うしかない。声を潜めて思っていることを口にした。

「高過ぎませんか？」

「……ブハッ」

「何で笑うんですか？」

「すまない。だって、ブハッ。さっきから、コロコロと表情が変わるから、何を考えているのかと思ったら。ブハッ」

「笑い過ぎです！ お医者様と一般人は、金銭感覚から全く違うんです！」

「そんな怒るな。わかったから。じゃあ、俺が適当に頼むからシェアして食べないか？ 色々食べられるぞ」

「えっ!? いいんですか!」

「ブハッ。ハハハッ。ダメだ。お前面白過ぎるだろう。反則だ」

「面白いなんて言われたことないですが……」

「俺はお前……」

「お前はやめてください」

「あ、ああ。すまない。月以上に面白い奴と出会ったことがない」

「どんな狭い世界で生きてるんですか！ っていうか、笑うんですね」

「どういう意味だ？」

私の聞いていたクールな貴公子はどこに行ったのだろうか？

話が盛り上がる中、先ほどの店員が注文を取りにきた。

「お決まりですか？」

柎さんの方だけ向いて注文を取る女性店員は、私をいない者とした態度だ。

「洋食セットとオムライス、あとナポリタンを。シェアするので取り皿を頼む。月、飲み物は？」

「えーっと、コーラで」

「ブハッ、じゃあコーラ二つ」

注文を取っていた女性が驚いた顔をしながらも、頬を赤らめている。

そう、普段のクールでイケメンな榎さんよりも、笑った方が何倍も魅力が増すのだ。

イケメンでドクターなんて、女性を惹きつける魅力的な要素しかない。

それでも私には関係ないと呑気に思っていたけれど、まさか関係ないどころか逃げられなくなるとは、この時は思いもしていなかった――

コーラが運ばれてきて、目が合ったのでグラスを持ち上げてお疲れ様の気持ちを込めて合図する。口にすると、炭酸のシュワシュワとしたのど越しが、疲れた身体に染みわたった。

「それにしても、食事に行つてコーラを頼む女性は初めてだ」

「へ!? ダメでしたか?」

「いや、素直でいいと思う」

よく考えれば、貴公子と呼ばれるほどのドクターとの食事だ。気を遣うのが当たり前かもしれない。けれど私の中ではボサボサマスク男で、チビ団子と言われたところからの始まりだ。今更、取り繕うつもりはない。

三度とも、団子頭でほぼすっぴん。ある意味最悪の出会いなのだ。色々考えてもしようがない。

今頃気づいたけれど、夜勤明けとは思えない爽やかな榎さんと違い、私は帰って寝るつもりだったから、崩れかけたお団子に普段着だ。断る選択肢がなかったとはいえ、ひど過ぎやしないか……料理は楽しみだけど、早く帰りたい……

「昨日の吉田亮くんだが」

「あつ、はい」

「やはり脳内出血していた」

「それで……どうなったんですか?」

「頭を切開して脳内にたまった血液を除去する手術を行った。幸い何とか間に合ったが、あと少し搬送が遅れていたら後遺症が残るか、最悪の場合は命を落としていたかもしれない」

「間に合ったんですね。良かった」

「月が気づいたんだろう?」

「私じゃなくて、亮くんのお友達が教えてくれたんです。頭を打っていたって」

「そうだな。亮くんは、友達にも救急隊員にも恵まれているらしい」

厳しいと言われている貴公子にさりげなく褒められ、更には優しい顔で微笑まれて、居心地が悪い。ボサボサマスクのままならよかったのに……

何はともあれ、亮くんが無事で本当に良かった。あの重大事故で奇跡的に死者が出なかったのだ。あと少し突っ込んだ場所が悪ければ、最悪の事態になっていただろう。

安心したところに、料理が運ばれてきた。話に夢中で忘れていたけれど、美味しそうな匂いに誘われ一気に空腹感が増す。テーブルの中央に置かれた料理は、私が知っている洋食屋さんとは見た目から違っていた。

洋食セットは、馴染みあるハンバーグとエビフライが乗っているのだが、ハンバーグは厚みがありオープンでじっくり焼かれて見るからに手が込んでいいる。エビフライは、今まで見たことのない

大きさを二尾も乗っていた。ハンバーグの肉汁とエビフライのサクサク感が見た目だけで高級だと伝わってくる。

オムライスとナポリタンは、熱々の鉄板に載っていてジュウジュウと美味しそうな音を奏でていた。

半熟トロトロの卵に包まれデミグラスソースがかかったオムライスと、庶民のイメージとは違ってたつぷり野菜と分厚いベーコンが入り半熟卵が載せられたナポリタンに、目が釘づけになる。

「ククッ」

「へっ!？」

料理に夢中になっていて、柎さんの存在を若干忘れかけていた。笑われたことに驚いて目の前に視線を向ける。

「いや。すごく幸せそうな顔をしていたから」

「この料理を見て幸せを感じない方がおかしくないですか？」

「あ、ああ」

私の勢いに押されて、同意の返事が返ってきた。

「いただきます」

「ああ」

目の前に貴公子がいようと、私には関係ない。今はこの料理を美味しく味わうことに集中する。貴公子の前では、遠慮したり少食のふりをする女性が多いのかもしれないけれど今更だ。

「ハンバーグを切っちゃってもいいですか？」

「ヘッ?」

「シエアするんですよね? 半分に切りますね」

「ああ」

「あつ、もしかして外科医の先生って自分で綺麗に切りたいとか、こだわりがあったりするんですか?」

「はあ? なわけあるか!」

「わかりました」

空腹で食べ物に夢中の私は、柎さんが楽しそうに見ていることに気づいていなかった。

洋食セットのライスは、店側が二人分に分けてサーブしてくれていたので、ハンバーグと共にいただく。一口サイズに割ったハンバーグをライスの上に載せ、一口食べて思わず声が出た。

「んゝ。何この肉汁!」

エビフライも一尾もらってタルタルソースをかける。箸を入れるとサクサクと音がした。

「こっちもプリプリ」

一人感動を味わっていると、視線を感じた。目を向けると柎さんが笑いを堪えてこちらを見ている。

「何ですか?」

「月」といって気を遣わなくていいし、楽しいと思って」

「へっ?」

「医者^{したた}の肩書に寄ってくるような女は、強^{したた}かで信用できない。見た目を取り繕って、裏で平気で腹黒いことをしている。俺の容姿に寄ってくる女は、自分の理想を俺に押しつける。イメージと違^{ちが}うと言われても、勝手に自分の中で都合の良いイメージを作っているだけだ」

「まあ、確かに。私の場合は、もっとおとなしい子だと思^{おも}ってたとか、思^{おも}ってたより大食いだねって言われます」

「ブハッ、お前……じゃなくて月。見た目は小さくて細いの^に、美味しそうにたくさん食べるそのギャップが俺はたまらないな」

それまで笑^{わら}っていた表情が一転して、ドクターの顔ではなくなり、獲物を狙うような鋭い視線が私に突き刺さってくる。

「先生……じゃない、柎さん、変なこと言^いってないで早く食べましょう。夜勤明けでお腹が空いてたんですよ?」

「今は、空腹よりも気になるものを見つけたけどな」

妖艶な笑みを向けられて、思わずドキッとしてしまった。圧倒的に経験値が違い過ぎる。

結局、半分以上を私が食べている間、柎さんは何が楽しいのかずっとこちらを見ていた。

ここ最近、病院に泊まり込む日が続いた。昨日も急な気温上昇に、熱中症の患者が途切れることなく救急搬送されて来る。ただ珍しく人員が足りていたので、一番長く病院に泊まり込んでいた俺が、一度自宅に帰らせてもらうことになった。

このまま働き続けたら、俺自身が倒れていたかもしれない。人の命を救う前に、まずは一旦睡眠を取って身体をリセットした方が良さそうだ。

自宅マンションまでは車だと五分ほどだが、運転が危^{あや}まれるほどの疲労を感じている。だから珍しくタクシーで帰ることにした。

医者^{したた}の不養生とはよく言^いったもので、患者には食事や生活習慣を注意するが、俺達の生活の方が何倍も身体に悪い。帰宅すると一直線でバスルームへ向かい、長めの風呂に浸かり眠りについた。

翌朝、病院のことが気になり早めに目が覚めた。

いつも車で出勤する俺は、髪はボサボサでメガネにマスクで病院に向かう用意をする。その姿で院内を歩くと、患者には俺だと気づかれなくて都合がよい。白衣に着替えるタイミングで髪も直すのだ。

いつもの癖でボサボサ状態で家を出たのだが、そこで車を病院に置いてきたことを思い出す。すでに近所のコンビニで朝食を買ったところで、今から戻^{かえ}って身なりを整えるのは面倒だ。

コンビニの前のバス停に、俺の働く港浜救命救急センター行きのバスがタイミングよく止まる。少し遠回りにはなるが、タクシーを探すより早そうだと、珍しくバスに乗ることにした。バスに

乗るのはいつぶりだろうか。朝の時間帯は、適度に混んでいて座れないので、俺は前方で吊り革につかまり立っていた。

バスが大通りに入り、バス停に停車した時だった――

『ドンッ』と激しい音と共に、身体に強い衝撃を受けた。

咄嗟に吊り革を持つ手に力を入れて転倒は免れたが、車内は混乱している。

どうやら俺が乗っているバスに、後ろから来たバスが追突したのだ。

運転手も驚いているが、すぐにサイドブレーキを引き対応に当たっている。俺もざっと車内を見回すが、重傷者はいないようだ。最後列に座っていた人達も、座っていたため衝撃を受けたが被害は最小限で済んでいる。

後ろのバスの方が、被害が大きいかも知れない。とにかく医者としてできる限りの対応をする。すぐに病院へも連絡を入れた。

バスの前方のドアを開けて、乗客の無事を確認しながら降りしている運転手に声をかける。

「港浜救命救急センターの久遠です」

「運転手の富田です。お医者様ですか？」

「はい。ザッと車内を見ましたが、重傷者はいないと思います。後ろのバスの状況を確認してきますので、もし何かあれば言ってください」

「はい。ありがとうございます」

後ろのバスに向かおうとした時、一人の女性が慌てた様子でAEDを抱えて戻ってくる姿が見

えた。

「すみません。それは？」

「あつ、バスの中で救護してくれている女性から頼まれて、そのコンビニで借りてきました」

「それ預かります」

「えっ？」

「医者です」

「あつ、お願いします」

後ろのバスにも医療従事者が乗っていたのだろうか。預かったAEDを持って乗り込んだ。

「AEDが必要な患者はどこだ？」

「ここです。貸してください」

声だけ聞こえるが姿は見えない。声の方を見ると、頭に団子だんごを乗せた小さい女が見えた。高校生か？ と訝しく思っていると振り返った女性と目が合う。

団子頭が印象的な、目がクリッとした美少女がいた。成人はしているのだろうが、すっぴんで小柄なせいか幼く見える。緊急事態だということに見惚れそうになり、思わず失礼な態度を取ってしまった。

「チビは出しゃばるな。俺がする」

「チ、チビ!？」

叫び声は聞こえたが、目の前の患者を優先すべく患者の前にしゃがみ、AEDをセットする。す

でに男性の服のボタンは全て外されて、ベルトは緩められていた。

何とか心肺機能が回復し、一緒に救急車に乗っていく。処置が早く、搬送も早かったことで、運転手は一命を取り留めた。

ホッとしたら、先ほどの美少女の姿が頭をよぎる。彼女はどの誰だったのだろうか。あの場で救護活動をしていたということは、医療関係者かもしれない。また会いたいと思ったのだ。

ふとした瞬間思い出すのは彼女のこと――

この日も、事故や病気の患者が次々に搬送されてくる。救急の人手が足りなくて、医局に戻れない状況だ。

そんな多忙な中、午後になって入った救急受け入れ要請は小さい子供だった。頭を打ってボーッとしているという一報が気になり、救急車の到着を出迎える。

到着と同時に後部座席のドアを開けた俺は、驚かされることになった。

なんと目の前には、あの時の彼女――チビ団子が救急隊員の格好をして乗っているではないか。だが、医者として再会を喜んでいる暇はない。

「患者は？」

「あつ、こちらです。吉田亮くん五歳です。血液型はA型、アレルギーはなしです。ご両親もこちらに向かつております」

先日と同様、ハキハキした対応に好感が持てる。今は時間がないが、どこか誰かわかったような

ものだ。

ストレッチャーを押しながらも、彼女を捕まえる楽しみにゾクゾクする。今まで感じたことのない高揚感が湧き起こった――

搬送されてきた子供は、早い段階で異変に気づいてもらったお陰で、スピーディーに搬送されて助かった。

小さい子供の手術は、大人の何倍も神経を使う。更には駆けつけた両親や警察への対応に追われて、深夜に少し仮眠を取れた程度で夜が明けた。それなのに病院から出た時に疲労感はなく、むしろ晴れやかな気分になっている。

普段なら確認することのない搬送記録を閲覧すると、彼女は港浜南消防署の所属だった。

病院を出て、彼女の職場までテンション高く車を走らせる。我ながらまるでストーカーだなど嘲笑^{あざわら}いながらも、本能が彼女を欲していた。

消防署の勤務は丸一日と以前に聞いたことがある。翌日は非番で、その次の日が出勤か休みかどうかだ。俺達よりはしっかり休みはあるが、それでもハードな勤務に変わらない。

車を消防署手前の路肩に止めて見ていると、ほどなくして彼女が出てきた。消防署の先にあるバス停に向かっているのだろう。車で追いかけてもいいが警戒されそうなので、車から降りて走って追いかけた。

追いかけながら、名前すら知らないことに気づく。どうやって呼び止めたらいいのだろう……

『おい』と声をかけてみるが、全く気づいてもらえない。

「おい。チビ団子」

「はあ？」

この呼び方には、反応が返ってくる。だが、こちらを振り返って戸惑った様子だ。

「それにしてもチビだな」

小さくて可愛いと思っているが、ついつい嫌な言い方をしてしまう。俺は小学生かと自分で突っ込みたくなるほど、無意識に好きな子からかつてしまう感覚だ。

名前も名乗っていないから、アナタと言われたが無性に気に食わない。

「久遠柁だ」

自分から名乗って彼女の名前を聞き出した。

「雫石月です」

「月、行くぞ」

平静を装っていきなり呼び捨てにしたが、基本女性を呼び捨てするどころか、下の名前で呼ぶことはない。少しでも月に近づきたい一心で必死だ。

普段なら帰って適当に腹を満たすか、空腹のまま寝てしまうのに、夜勤明けの空腹を口実にメシに連れ出す。

車に乗るのを躊躇う月に、昨日の患者の話題まで持ち出してしまふほど俺は必死なのだ。

それほどまでに、俺の本能が彼女を欲している――

車を走らせていると、助手席でうつらうつらしている姿でさえも愛おしく感じる。誰にも教えた

ことのない、俺の癒やしのレストランまで車を走らせた。

レストランの前は綺麗な海が広がっている。このあとは、急変の患者が出たら病院に戻らなければならぬが、何もなければ明日の朝まで休みの予定だ。月の存在がなければ、普段なら病院で仮眠を取ってそのまま働いている。月の存在が俺を突き動かすのだ。

目覚めた月を連れて、レストランへと入る。以前から、この従業員の女性から好意の視線を感じていた。今まで世間話をする程度で放置していたのだ。どうせ俺の容姿と医者という職業に惹かれたとでも言うのだろうか……

だが、今日は月への敵意と嫉妬を感じる。だから、わざと親しく見えるような態度を取った。いや、これから親しくなるから決して嘘ではない。

小さい身体で、もりもり食事をする月を愛しく思いながらも、このあとの作戦を考えていた。

俺は、気長に攻めるタイプではない。

狙った獲物を逃すつもりはない――

第二章 俺様ドクターと急展開

「はぁ、お腹いっぱい」

美味しくてつついっつい食べ過ぎて、無意識に口から出た言葉。馴染みのある料理のはずが、お値段だけのことはあって初めて食べる料理のようだった。満腹で思わずお腹を擦ってしまう。

「ククッ、満足していただけたようで何よりだ」

「美味しかったです」

「ああ、そろそろ行こうか」

「はい」

レジでさつと会計を済ませた柎さんが、私の腰に手をあてエスコートする。一連の動作がスムーズ過ぎて、口を挟む余地さえなかった。

「えっと……。ごちそうさまです？」

「何で疑問形なんだ？」

「初対面に近い人に本当に奢ってもらっていいんですか？」

「当たり前だろう？ 俺が強引に連れて来たんだ」

「でも」

「この話はおしまいだ」

まだお店から出ていないところで、これ以上話をするのは得策ではない。今度、お礼をしようと考えながらお店を出て車に向かっている時だった。

——ゴロゴロゴロ

雷の大きな音がしたと思った次の瞬間——

——ザー

突然のゲリラ豪雨に見舞われる。バケツをひっくり返したようなとはよく言ったもので、本当に一瞬にしてびしょ濡れだ。

「急いで」

手を引かれて車まで走り乗り込むが、髪から水が滴るほど濡れてしまった。私のお団子頭も、水分が染み込んで若干重たくなっている。

柎さんを見ると、先ほどまでの貴公子スタイルでもなく、先日のボサボサ頭でもなく、固められていた髪は濡れてサラサラと前に落ちていた。いつもより少し幼く見えるけれど、前髪の隙間から見える視線は妖艶で、まさしく『水も滴るいい男』とはこの人のためにある言葉ではないかと思ってしまう。

「びしょ濡れになってしまったな」

「びっくりしました」

「乾かさないと風邪を引いてしまうな。月のこのあとの予定は？」

「特には……。明日の出勤に備えて休養するぐらいです」

「奇遇だな。俺も呼び出しがない限りは休みだ」

休みだといっても、呼び出しがあれば駆けつけるのだろう。お医者様は本当に大変だ。救急隊員はシフト制で、隊員が急病だったり人手がいる事件事故が起きない限りは呼び出されることはない。「この先にあるリゾートホテルへ寄って、服を乾かすか……。ちよっと仮眠もしたい」

「えっと……この先って最近オープンしたばかりの人気スポットの高級リゾートじゃないですか？」

「神楽坂リゾートが、宣伝してるところだ。『都会から近いオアシス』だったか？ テレビでよく取り上げられてるな」

「テレビで特集されているのをよく見ます。愛妻家で子煩悩な社長さんが、都心から近くて子連れでも気軽にけるリゾートホテルを建てたんですね」

『神楽坂リゾートエタニティ』は、都心から車で一時間ほどの距離に、都会の喧騒を忘れて家族やカップルで楽しめるオアシス空間をコンセプトに建てられたホテルだ。

連日予約が埋まっていて、かなり先まで予約が取れないはず。

ところが、柎さんはスマホを取り出してどこかにかけ始める。

「すまない。急なんだがエタニティに部屋を取ってもらえないか？」

知り合いが働いているのだろうか？ 電話相手の声は、私までは聞こえない。

「ああ。助かった。サンキュー」

状況が理解できないまま待っていると、柎さんが説明してくれた。

「神楽坂リゾートの社長の弟が友人なんだ」

「そうなんですか？」

「ああ。たまたまキャンセルが出た部屋があるから、明日の午前中までなら使っていって」

「雨で濡れたのを乾かすだけに使わせてもらうなんて、なんか申し訳ないですね」

「……気にするな」

柎さんは何か言いたげだったが、私にはそれが何かわからない。純粹に風邪を引かずに済みそうだと思うのだ。食事をして亮くんの状態も聞けてひと安心したので、このまま帰ると思っていたが、まだ一緒にいられることが嬉しい。この気持ちの意味が、恋愛経験のない私にはまだ素直に受け入れられずに戸惑っている。

レストランから車で五分ほどで、ホテルが見えて来た。海沿いの広大な敷地の中に、たくさんアミューズメント施設があるらしい。テレビで紹介されているのはほんの一部で、あとは泊まった人への楽しみのため配慮されているのだ。

真っ白な入り口のゲートには、入場受付ブースがある。まるでテーマパークに来たような感覚だ。

「ようこそいらっしゃいませ。神楽坂リゾートエタニティへ。お名前をお伺いいたします」

「久遠柎です」

「久遠様。ありがとうございます。久遠様のお部屋の受付は、コテージエリアとなっております。このままお車で、水色の矢印の通りにお進みください。施設内全て徐行となっておりますので、ご協力くださいませ」

「ああ。ありがとう」

入り口ゲートからすでに洗練された丁寧な接客で好印象を与える。ゲートを入ると、道路には景観を邪魔しない色合いで、目的地まで色別の矢印がついており、どこに向かえばいいのか一目瞭然だ。道路は一方通行になっていて対向車も来ない。

ゴミ一つ落ちていない道路に、視線の先には海が広がり、綺麗な花が咲いている。

先ほどのレストランから見る海の景色も素晴らしかったけれど、ここは別世界に入り込んでいるようだ。

「素敵ですね。雨に感謝しなきゃ」

「喜んでもらえて良かった」

「私では、予約すら取れませんから」

ゲートで案内された通りに進むと、小高い丘の上に低層の大きな建物が見えて来た。きっと、この建物が本館なのだろう。

本館の裏手を通り過ぎ、今度は下っていく。するとその先には驚くべき光景が広がっていた。まるで、童話の中に入り込んだようなコテージが点在している。たくさん木が植えられて、林の中にいるような感覚になるのだ。すぐ側にビーチがあるとは思えない。公園や芝生の広場があり、各コテージの前には駐車場とバーベキューができるウッドデッキであるのだ。

「夢の国に来たみたい……」

「俺も初めて来たが、これは子供が喜びそうだな」

「喜ぶでしょうね。私も感動してます」

「とにかく、風邪を引く前に風呂に入ろう。まだ時間はたっぷりあるんだ。あとでゆっくり見たらいい」

「そうですね」

「月、先に入って来い」

「えっ、柎さんお先にどうぞ。私の方が時間がかかるので」

「じゃあ、一緒に入るか？」

「へっ!？」

「冗談だ。じゃあ、すぐに上がってくるから、タオルでしっかり拭いておけよ」

「はい」

バスルームに柎さんが入って行ったのでひと息つく。まだ少し水の滴^{した}っている超絶なイケメンに、一緒に入るかと言われて動揺しないほうがおかしいだろう。それでなくても、ずっと胸が高鳴っているのだから。からかわれているとわかっていても、顔が火照^ほってしまった。

冷静になって、気持ちを落ち着けようと部屋の中を見て回る。

コテージは、広いリビングダイニングの一面に畳スペースであり、更にはキッチンとお風呂とトイレが一階にある。

リビングの端に階段があり、上がるとベッドルームが二部屋もあった。メインのベッドルームにはキングサイズのベッドが置かれて、家族連れなら川の字で寝られそうだ。

もう一部屋も、シングルベッドが二台に簡易のベッドも畳まれて置いてある。大人数での旅行にも最適だ。

一通り見終わって、リビングに戻るとちょうど柎さんがお風呂から出たところだった。バスローブを羽織っているけれど、胸元が大きく開いていて目のやり場に困る。

普段から職場で筋肉質な男性は見慣れているはずが、一見細く見える柎さんが脱いだらムキムキなのはズルイ。思わず魅入ってしまった。

「俺に何かついてるか？」

「えっ？」

「いや、こつちを見てるから」

「いえ。何もあります。では、私も入ってきますー！」

「ああ。風呂が沸いてるからゆつくり入ってこい。洗濯乾燥もここのできるから」

「そうなんですか？」

ここに着いてからずっと驚きっぱなしなのに、バスルームも期待を裏切らない豪華さだ。普通のホテルなら、ホテル内にコインランドリーがあり、私も利用したことがある。

だが、ここは広々とした脱衣所に大容量の洗濯乾燥機が置かれ、アイロンまで用意されていた。至れり尽くせりとはこのことだろう。

濡れた服を洗濯機に入れて回し、バスルームに入った。

家族連れでも一緒に入れそうなほど大きなバスタブには、たっぷりの湯が張られている。

冷えた身体を温めながら、今朝からここに至るまでのことを振り返るが、急展開に驚くしかない。

これからどうしたらいいのだろうか？

仕事から帰ってお風呂に入るはずが、なぜか高級ホテルのお風呂に入っているのだ。今更どうしようもないので、団子頭をほどき髪から洗っていく。アメニティは上質のものが並び、バスルーム全体に良い香りが充満する。いつも以上に時間をかけてゆつくりとバスタイムを満喫した。

柎さんは仮眠をするだろうし、洗濯が乾くまで待たなくてはならない。時間はたっぷりある。

バスルームから出て、下着も一緒に洗ってしまったことを思い出した。全裸にバスローブを羽織るしかない。前をしっかり合わせてはだけないようにする。

ドライヤーも高級なものが置かれていて、さすが一流ホテルだと感心した。ロングヘアーを入念に乾かしていく。元々ブラウンの髪は染めたことがなく、サラサラしているのが私の自慢だ。

リビングに戻る頃には、かなりの時間が経ってしまった。

柎さんは、リビングのソファに座ったまま寝ている。器用というのか職業病というのか、どんな体勢でも寝られるのだろう。起こすのは忍びないけれど、寝心地の良いベッドで寝た方が短時間でも疲れが取れるはずだ。

「柎さん、柎さん」

「んんっ」

寝顔も綺麗なイケメンからの色っぽい吐息に、私の方が恥ずかしくなって頬が赤くなるのを感じ